審査の結果の要旨

氏名　後藤　直

本論文は、弥生時代の初期農耕文化の源流とされる朝鮮半島の初期農耕文化について論じたものである。朝鮮半島の初期農耕文化の具体的な様相の地域差、時期差をさまざまな角度から明らかにしたうえで、日本列島の初期農耕文化がその源流である朝鮮半島とはかならずしも同じではなく、そのまま受け入れたのではないことを明らかにしており、成立した農耕社会の内容も大きく異なるものであったとの結論に至っている。朝鮮半島の影響のみを重視してきた従来の初期農耕文化研究とは一線を画するものであり、重要な視点を提示したと言えよう。本論文を一貫しているのは、個別遺跡、遺物資料についての徹底した検証とそれからの緻密な論理の展開であり、そのことが本論文の結論を十分説得力あるものとしている。

第１部では、考古学のもっとも基礎となる土器編年の枠組みを独自に作り上げ、朝鮮半島の南北を体系的に見る視座を確立している。その編年体系を踏まえた上で、北部九州に多く見つかる朝鮮系無文土器に着目した。弥生時代前期末は、この土器の登場にあわせてやはり朝鮮半島を源流とする青銅器が登場する重要な画期となっているが、まとまって出土する遺跡は数少なく、渡来した人数は限られるとし、この時期においての変革の主役がやはり弥生文化側にあったことを明らかにしている。

第 2 部では青銅器を副葬する墓の朝鮮半島内における地域性や時代による変化を明らかにする。そして、弥生時代の青銅器文化がもっとも密接な関係を持っていたのは朝鮮半島の東南地域であると結論する。ついで、日本列島と朝鮮半島では、青銅器文化の展開に相違があり、朝鮮半島では青銅器はおもに墓の副葬品として発見されるが、弥生文化では青銅器の儀礼的な埋納が発達することから、それを社会の差異の反映と見て、弥生時代における首長層が相対的に未発達であったとの理解に至る。

第 3 部では日本および、朝鮮半島出土植物遺体の網羅的な集成をおこない、弥生時代では稲作が主体であるが、その源流である朝鮮半島では、南北での濃淡はあるものの、イネはほかの畠作雑穀とともに出ることが多く、稲作が主体というものではなかったことを明らかにしている。旱地農法を基盤に畠作と水田稲作が結びついた朝鮮半島南部の農耕が日本列島に伝えられると、日本列島の自然条件に適応して、湿潤農法に再度変容するとともに、長期継続型の集落を中心に灌漑水田農耕で結びついた共同体規制の強い社会が形成されていったのであるという、重要な視点を提起している。

現在進行している弥生時代およびそれと同時期の朝鮮半島の年代的な見直しから今後修正の必要な部分も出てこようが、本論文が日朝両地域の初期農耕社会の比較研究をする上できわめて重要な論点を提示していることに疑問はない。よって、審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。